「小さな親切」運動本部賞

理解という親切

岩手県　一関第一高等学校附属中学校　三年
千葉　愛唯花

新型コロナウイルスが流行して、3 年が経ちました。マスクを着けることも、すっかり日常になりました。去年の秋、まだマスクの着用が義務だったころ、こんな経験をしました。

私は、友達に会いました。彼女は聾者(ろうしゃ)で、私は彼女と手話で会話します。手話は、手の動きだけだとよく思われますが、表情や口の動きも必要です。だから、マスクをつけての会話は少し困難でした。

彼女は慣れていたようですが、私は表情なしでの手話は読み取れなかったので、彼女にマスクを外してもらいました。人が来たり、店員さんに着用を求められたら着けて、なるべくほかの人に迷惑にならないようにマスクを外してもらっていました。

公園でマスクを外して会話しているとき、一人の男の子とその母親が公園に来ました。男の子は、私たちを見て、

「ママ。あの人たち、マスクを外しているよ。駄目(だめ)なんだ。」

と言いました。私は戸惑(とまど)いました。彼女には、男の子の言ったことが聞こえていません。正直に伝えるべきか、ごまかしてしまうか迷いました。正直に伝えたら、彼女は悲しむと思ったからです。

どうしようかと考えていたら、男の子の母親が彼に、

「あのお姉さんたちは、声じゃなくて、手でお話するの。それには顔をしっかり見なくてはいけないから、マスクを外しているの。駄目なことではないのよ。」

と言いました。

私は驚きました。耳が聞こえなくてかわいそうだからではなく、「手話で話すから」と言ってくれたからです。手話で話したり、聾者だと言ったりすると、かわいそうだ、自分より劣っていると思われることが多いのですが、違いを受け入れて、悪いものではないと言ってくれて、とても嬉しかったです。

その言葉が、私の戸惑いや不安な気持ちを消してくれました。彼女に一部始終を伝えると、彼女も満面の笑みになりました。男の子の母親のような、違いを認めることができる人が増えれば、差別はなくなるのではないかと思います。

そして、人に何かをしてあげることだけが親切ではなく、人が生きやすい環境をつくってあげることも、親切なのだと考えました。自分と国籍や外見などが違う人と接することは、難しいかもしれません。しかし、違いを認め、自分と同じ人間だと思うことで、きっと人は親切になれます。

そんな親切な人が増えていけば、世界はもっと優しくなると思います。私も、人との違いを受け入れて、お互いの存在を肯定し合うことができる人になりたいです。違いを理解し、認め合える人が増え、親切が世の中にあふれてほしいです。